

空は、信を得て以降は、仏の理性が衆生の心に遍満すると見るのだから。

以上のように、此土で信を得て以降の状態と、死後、浄土で達する状態との間に優劣を見るか否かという点について、二師は対照的な説を示す。そしてこの違いが、此土において聖道門的な行業を認めるか否かという教学的立場に関連してくる。則ち、「具縛の凡夫」の自覚が強く、此土で信を得て以降の状態は、浄土往生後に達する状態より遙かに低いと見る幸西は、此土において聖道門的な行業を認めない。(聖道無得道説)。(なお幸西は、浄土に往生したならば、菩薩の第四十一位(初地)に達し聖者となる故に、聖道門の教えは有効になるとする)。これに対し、此土で信を得て以降の状態は、死後、浄土において達する状態に准じるのであり、仏の理性が念仏行者の心に遍満すると見る証空は、信を得て以降は、聖道門的な行業も開会され、此土における行業として認められるとする立場を示している。(証空は、念仏行者は、浄土において第五十一位等覚位に達するとする)。

以上のように、幸西と証空は、衆生が此土で信を得て以降の状態と、死後、浄土において達する状態とを比較する中で、此土における信について認識する。そして、浄土往生後に達する状態と比較する中で捉えられた信理解が、此土での行理解、特に聖道門的な行業を認めるか否かを判断する上での根拠となっている。則ち二師は、同じ問題意識の下で、信に関して理解している。そして互いに対照的な説を示している。以上のような点において、幸西と証空二師の間における、信に関する思想交

渉を読み取ることが出来る。(法然門下のうち、幸西や証空と同じく、自己の救済の道を、特に阿弥陀仏の他力の働きに見出すグループに属する、隆寛(一一四八―一二二七)や親鸞(一一七三―一二六二)の信理解においては、このような教学的な論理の展開は見られない)。

良忠の本願観——『観経疏伝通記』を通じて——

沼倉 雄人

浄土宗三祖然阿良忠上人において諸行非本願・諸行往生の問題が注目され、凝然『浄土法門源流章』にも、教義的な特徴としてとりあげられている(『浄全』一五、五九九頁下)。善導が本願に誓われた称名念仏による罪悪生死の凡夫の報土往生を示し、法然が『選択集』を通じて廃捨を勧めた諸行を往生可能と提示することはどのような解釈によるものか、善導『観経疏』の注釈書である『観経疏伝通記』(以下『伝通記』)の整理から、諸行往生説の淵源の一端として、良忠の本願観について検討を行いたい。

良忠は慧遠『無量寿経義疏』の分類を基本とし、独自に四十八願の分類整理を行い、本願を分析している。『伝通記』の中で四十八願の分類に関する説示を整理すると(1)施為・趣求に準じる二分類、(2)撰衆生願の三分類(凡夫、二乗、菩薩所託)、(3)凡夫引接の願、などがあり、これらの説示から良忠の四十八願分類を整理すると以下のようなことになる。

撰法身、撰浄土の五願(趣求)：第十二、十三、十七、三十

一、三十二願

撰衆生の四三願(施為) ……以下の通り。

凡夫所託(一六願) ……第一―十一、十五、十六、二十一、

三十三、三十七願

〔凡夫引接の願(四願)〕 ……第十八、十九、二十、三十

五願

二乗所託(一願) ……第十四願

菩薩所託(一八願) ……二十二―二十六、二十八―三十、三十

六、四十一―四十八願

未分類(四願) ……二十七、三十四、三十八、三十九願

良忠はこのように四十八願全体を把握しているが、第十八願を特に生因の願と呼称している。この例は『伝通記』中、処々に散見され、特に『観経疏』定善義、真身観所説の三縁釈の結文(『浄全』二、四九頁上)を解釈し、それを通じて良忠は、『無量寿経』に本願に誓われた生因の行は称名念仏のみであつて、これが『無量寿経』全体を通じて強調されていることを願成就の文、三輩の各文、流通分を引いて主張し(『浄全』二、三五四頁下―三五五頁上)、『阿弥陀経』『観経』にも同様の意図があることを述べる。このように善導の説示を具体的に引証し、本願に誓われた実践行は第十八願に示される称名念仏であることを説明した。言い換えれば、これによって第十八願を生因の願つまりは「衆生が極楽に往生するための具体的な実践行を誓われた願」としてあらためて位置づけ、定義している。

また良忠は、『伝通記』において定散の行も「因縁和合して、皆、往生することを得」とし、「凡夫、報土に生ずる時、願力、加わらずんば生ずべからざるが故に、別して佛願を以て増上縁

と爲す」(『浄全』二、一二八頁下)とも述べ、凡入報土は願力の加被によって成立するものであることがわかるが、換言すれば良忠は「凡夫が定散の行(諸行)によって往生するためには阿弥陀仏の願力の加被が必要である」と述べていることになる。では念仏以外の行に加被し、諸行によって報土に往生させる願力とは何か。この問題に対して良忠は撰機の願を提示する。良忠は、撰機の願は機根を撰取することを意図した願であるため行は成就し難く、それに対し生因の願は機根の隔てなく、往生するための行が示された願であるから行は成就し易いとしている。そして行者の行が成就するのは仏果の冥加を被るものであるとして、それぞれの行者の行が被る仏の冥加と願力について述べ、称名は仏の冥加、撰凡の願、生因の願の力を被ることに他の行に超えているとしている(『浄全』二、二二二頁上―二二二頁下)。これらの説示を終わって、良忠は『観経疏』の解釈に返り、「五乗、齊しく入る」のために正しく託した「仏願」は生因の願にかぎったものではなく、機根の撰取を目的としての仏願(四十八願全体)を表したものと解釈したものである。

日蓮研究に関する方法論上の再検討

——実証主義の持つ限界——

笠井 正弘

一 問題の所在

第二次世界大戦後二〇年間余、宗教学での日蓮研究は神道研究と並んでページの対象となり、歴史的研究ないしは思想的